



TITLE:

計画8-2 丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響(VI 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

福田, 史夫

CITATION:

福田, 史夫. 計画8-2 丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響(VI 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2001, 31: 138-139

ISSUE DATE:

2001-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165643>

RIGHT:

1.5km²と非常に狭かった。このメスの遊動域はTK群の遊動域内に含まれていた。6月までのTK群とIC群の遊動域を比べると、同時期ではお互いに避けあっていた。

③1999年の調査時にはTK群の遊動域内で遊動していた単独オスHM2はTK群の遊動域を離れ始め、2000年11月以降は以前の遊動域から5kmほど離れた地域を遊動していた。

④一方、TK群に隣接した遊動域を持つ単独オスHM4は1999年の交尾期に一時、TK群の遊動域内に滞在していたことが解かっているが、2000年の10-12月にはそのような遊動域の一時的なシフトは見られなかった。

計画 8-1

中国地方東部におけるニホンザル地域個体群の分布調査

渡邊義雄（美作女子大）・林 勝治（広島県立大）

昨年に引き続き、中国地方東部において、ニホンザルの分布調査を行った。岡山県では、未調査であった9町村で聞き取り調査を行った。いずれの町村でも、群れの生息は確認できなかった。しかし、県東北部では、兵庫県からのハナレザルの侵入が推測された。まだ、未調査の町村があるが、昨年まで確認された以外には群れは存在しないと思われる。また、本年度は、1998年に行った質問紙調査のうち、被害状況の推移について分析した。群れの生息地を中心に20年前から被害の地域が周囲に広がっていることが分かった。被害が出始めた時期別に、その植生を分析した結果、自然林及び2次植生の割合は6割前後で比較的安定している。しかし、ここ数年前から被害の出始めた地域には、二次林の構成ではコナラ群落が少なく、一方で、農地が多く含まれていた。このように、近年になって、サルによる農地への被害が広がっている様子が分かった。

鳥取県では、日野町と八東町周辺の地域を中心に聞き取り調査を行った。この2町以外では西部の江府町にニホンザルの群れが生息しているとの報告があった。また、鳥取県公文書館において、各地の町誌を閲覧したところ、1970年くらいまでは、大山町・若桜町・国府町・河原町に群れが生息していたようである。

計画 8-2

丹沢東北山塊におけるニホンザルの生息と人間活動の影響

福田史夫（共立薬科大）

聞き込みと踏査に基づいて3群の生息が明らかになり、さらに複数群のフィールドサインによる情報を得ることができた。調査地域内ではM群のみが野荒らしをしており、隣接するU群を含めて他の群れによる野荒らしは生じていない。

1) 道志川側の集落でM群による猿害が生じていないのは、道志川側はスギの植林が山麓まで被っており、しかも、北に面した山麓のため冬季は寒く、サルにとって利用する自然の食物がないためであると考えられる。東部の鳥屋地区は道志川側と同じように麓まで植林に被われているが、冬には日溜まりとなる南山や仙洞寺山があり、しかもその間に集落があるため、M群のサルたちにとって移動の際に農耕地に侵入できる地形となっている。2) 野荒らしをしないU群とM群の、行動域内の人間活動の違いは、行動域内の集落農耕地と猟区の有無である。U群の行動域内の80%以上が猟区になっており、集落農耕地は皆無である。が、M群の行動域の10%弱が猟区に組み込まれているだけである。猟期の週末はシカ、イノシシや鳥獣が行われる。そのため、

U群はヒトを恐れ観察者に会おうと警戒音を出して逃げる。しかし、最近のフン分析によって判ったことは、U群に接近しているオスが時々野荒らしをしていることが判った（浅沼、私信）。M群とU群の生命表を書き上げられる資料をとり、サル保護・管理のための一助としたい。

計画 8-3

黒部川流域に生息するニホンザル地域個体群の動態（ダム建設に伴う遊動域の変動）

赤座久明（富山県立新川女子高校）・加藤 満（愛知県立旭野高校）

富山県宇奈月町の黒部川流域に生息するニホンザル自然群を対象にして、ダム建設に伴う遊動域の変動を調査した。

宇奈月町下立から笹平までの黒部川流域 13 キロの区間で 10 群を観察記録したが、このなかの 1 群は冬季調査の際にダム左岸で初めて観察した新群である。99 年 10 月にダムに貯水が始まってから、ダム周辺に生息する ON 群、MO 群、MT 群はホームレンジをダムより下流側に大きく拡張させたが、今回の調査では、MO 群と MT 群のホームレンジは前年と変わらず、新たな下流への拡張はなかった。一方、3 群のうち、最も下流側に位置する ON 群はホームレンジを、黒部川に沿って下流方向へ 1100m 広げた。この群れのホームレンジは 99 年度調査では、前年より 1800m 下流に拡張したことを観察しており、2 年間で約 3 km という下流側への急速な下降が記録された。ダムの貯水開始以後、上記の 3 群が下流方向へホームレンジを移し始めている一方で、98 年度調査で初めて識別された DA 群は、上流側からダムの中央部へ進出して、ここに滞在する時間が増加している。また、冬季調査で確認した新群も DA 群と同様、ダム完成後に上流から下降して来た群れと考えられる。ダムにより下流域にホームレンジを移行させる群れの後へ、上流側から新たな群れが移入するということに、隣接する群れでホームレンジの連鎖的な変化が進行している。

計画 8-5

中高度域にすむヤクシマザルの食性と人口学的資料の収集

好廣真一（龍谷大・経営）・大竹 勝

ヤクザル調査隊は、1988 年から毎夏、屋久島西部の瀬切川上流域の大川林道終点付近、標高約 750m～1350m にすむヤクシマザルを継続調査してきた。植生は照葉樹林・ヤクスギ林移行帯である。群れの正確な分布と、群れサイズ、性年齢構成を毎年記録して、屋久島中高度域における個体群動態のメカニズムを明らかにする。本年は、7 km²の地域を 54 人で調査した。このうち左岸の 4.25km²は林道が入って植生が攪乱され、右岸の 2.75 km²には自然植生が残されている。

左岸では、1988 年以来 4 群が確認され、毎年の遊動域もほぼ一致しているが、昨年までは群れの識別が不確実であった。本年は一部の個体識別と継続追跡により群れを識別した。各群のサイズと、0 才児数／オトナメス数は、HR 群：24、2/8；P 群：15+、4/5；OM 群：12、2/3；SY 群：19、2/7 で、出産率は 42% (10/23) であった。

右岸では、調査域を誘導域の一部とする 5～8 群を確認・確定した。観察はいずれも断片的で、群れ分布を推定できず、群れサイズと性年齢構も不明である。

確認された食物は、ハイノキの葉と未熟果、ヒサカキ・ヒメヒサカキの果実、キノコ、ヒメバライチゴの葉、ウスバキトンボ、サワガニであった。